

さいたまここに人あり



地域のつながりが力になって

草加・元気っ子クラブ代表理事

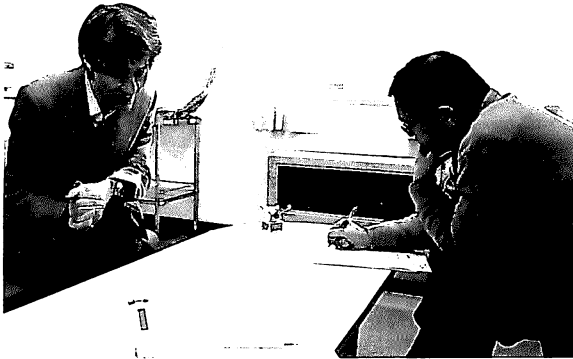
小池奈津夫さん

「子どもを保育園、学童保育に預けるなかで、地域に関心をもって活動するようになった」と語る高校教員の小池奈津夫さん。子どもたちが卒業したあとも、学童保育を運営するNPOの代表として、いまでも地域に根ざしてさまざまなネットワークをつくりながら活動をつづけています。同じ草加市で学童保育運動に関わってきた研究所の山内事務局長が、お話を聞きました。

草加市で子育てスタート

私は新潟県出身で、東京の大学を出て、浦和工業高校から教員生活をスタートしました。その後、結婚して妻が草加高校の勤務になったので、子どもが6カ月のときに草加市に越してきました。

共働きですから、当然子どもは保育園に預けなければなりません。保育園の役員をやるようになり、だんだんと父母会



聞き手：山内（右）

連合会など草加市全体の運動に関わっていくようになりました。

いまでこそ保育園への入園希望者が急増し待機児童が大きな問題になってますけど、私が保育園の父母会連合会の会長になったころは、保育園の統廃合という問題がありました。当時は一部の保育園では定員の半分くらいしか園児がおらず、ガラガラなところもありました。そういうなかで、保育園を減らそうという話が出てきたんです。保育士さん達たちとも一緒になって反対運動にとりくみました。3万筆近くの署名を集め、市議会に請願を出しました。この請願は不採択になりましたが、統廃合は中止となりました。

草加の学童保育運動は、1960年代の後半頃、松原団地に住んでいた方たちから始まったようです。自分の子どもが小学校に入ったときに、「行き場所がない！」ということで、保護者自身が、場所を探し、指導員を探し、自主保育を始めました。こうした運動の中で、196

8年に公立の学童保育所が1カ所できました。

その後、児童館に併設される形で公立学童が何カ所か作られていきますが、市政の変化などもあり、1978年に谷塚児童館が建設されて以降は、一切児童館が作られなくなりました。児童館が作られないということは、学童も増えないということです。

市が学童をつくらないというなかで、保護者自身によって「共同学童保育室」が、次々とつくられていきました。しかし、行政からの援助がなく、場所を見つけることさえ本当に大変なことでした。

山内 私も八幡小にいたときに、冬休みの1週間、学校の技能員室（宿直室）で学童保育をやったんです。そうしたらどうしても4月以降もほしいということになって、市に要求して体育館の用具室で始めたんです。30人くらいの子もたちに、指導員はお母さんたちや教員が交代でした。そのうち、私の住んでいたアパートが昼間は空いているから、そこで学童保育室をやることになって。半年くらいで「うるさい」と追い出されてしまった。その後は、体育館の用具室なんかもやっていたんだよね。

そういうことが、どこでもあったんですよね。

同じようなことが瀬崎学童というところでもありました。アパートを追い出されたりして、場所を見つけることが本当に大変でした。苦勞して、いろいろと相談するなかで、学校の空き教室を利用させてもらいたいという請願署名運動を始



子どもまつり

学童保育の拡充もとめて

めることになりました。1991年のことです。この署名運動のときには、町の地図を見ながら一軒一軒まわって、町会の過半数の署名を集めたそうです。保守系議員も賛同してくれていたんですけど、結局継続審議が続いて不採択になったんです。

上の娘が小学校に入り、学童保育にお世話になるようになりました。下の娘はまだ保育園でしたので、私が保育園の役員をやり、妻が学童保育の役員をやっていました。空き教室利用を求める請願と保育園の統廃合に反対する請願の両方が不採択になったということを受けて、いろいろと考えました。子どもに関わる団体はたくさんあるのに、それぞれがばらばらに運動をしているのはダメだということを感じました。

子どもに関わる問題は、保育園や学童だけではありません。例えば、公園の整備ということも大きな問題でした。当時、市内に公園はたくさんあったんだけど、

ひとつの公園が家1軒くらいの広さで、ボールを使えない、トイレや水道もないなど、整備が遅れていたんです。そこで、保育園と学童保育の要望に加えて、公園の充実などを求める署名を、保育園の保護者や保育士、学童の保護者や指導員などと一緒に、いろんな団体に呼びかけて始めました。みんなで一生懸命に取り組んで、3万筆以上の署名を集めました。

各会派の議員さんをまわると、「学童や保育園は共産党」というイメージがあり、それを払拭するのは大変でした。すべての会派の議員さんをまわって、本当に子どもたちのために取り組んでいるのだということを真摯に訴え、少しずつ理解してもらえるようになりました。予防接種の有料化反対の運動などもありました。一つひとつの運動のなかで、こまめにいろんな会派の議員をまわり、だんだんと話をきちんと聞いてもらえるようになります。そういうなかで、学童についてもだんだんと理解してもらえるようになります。

こうした運動が実って、1996年、八幡北学童と青柳学童が、初めて空き教室を使わせてもらえるようになります。そのあとは、議会でも多くの議員さ

んに理解していただき、私たちの請願も通っていきようになりました。

とにかく、学童保育の政策は遅れているんです。1991年くらいまでの国の答弁は、「共働きや一人親の子どもへの特別の施策は必要ない」というものでした。「児童館」のような全児童への施策をやつていれば、共働きや一人親家庭の子どもたちに対する特別な施策はいらないと言っています。

保育園は1948年の児童福祉法に載るんだけど、学童保育が法律に載ったのは1998年。保育園は「児童福祉施設」で、学童保育は「児童福祉事業」という

位置付けだったんです。「施設」であれば基準があるのに、「事業」だと基準はありません。結局、場所によってはアパートの一室だったり、職員の数の基準もないんです。

2007年には学童保育（放課後児童クラブ）に対するガイドラインもできましたが、あくまでもガイドラインだから法的拘束力はないんです。例えば、児童一人あたり、1・65㎡が基準とされていますが、ニーズが高く待機児も出ている都市部では、結局、守られないこともあるんですよ。

「元気っ子クラブ」を立ち上げ

山内 「草加元気っ子クラブ」をつくったきっかけはなんですか。

最初は学童保育への草加市単独の補助はなかったんですが、家賃補助が出たり、空き教室が使えるようになったりしてきました。2002年頃には、市内22の小学校に対して学童保育は19カ所。公立公設学童が7カ所で、共同学童が12カ所でした。すべての小学校区に学童がある

という状況ではありませんでした。待機児童が生じている学童もあり、ニーズに見合うよう学童を増設してほしいという請願を出したら、それが議会で認められました。

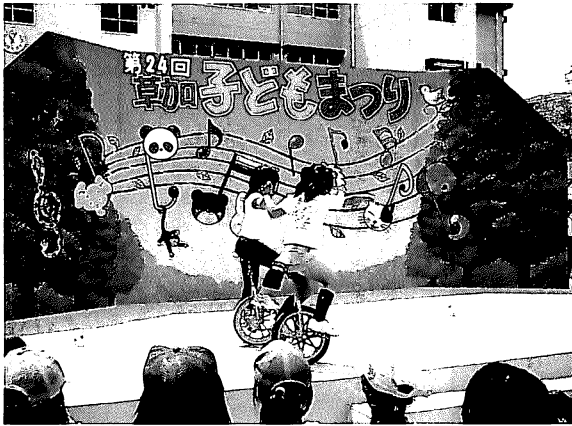
草加市の理解もすすみ、「すべての小学校区に学童を設置する。空き教室2教室程度の広さを確保する」ことを表明してくれました。しかし、市は「施設につ



子どもまつり

いては公設でつくるけど、運営は民間で行いなさい」と言い、各父母会で構成されている「草加市学童保育連絡協議会」がNPO法人格をとって、運営していくことになりました。それが、NPO法人「草加元気っ子クラブ」（以下「元気っ子」）です。

それまでは保護者が運営していましたから、職員の社会保険などの手続きとかがきちんとなされていない学童もありました。自分も仕事を持っていない保護者が、指導員の雇用手続きをきちんとやること



子どもまつり

は本当に大変だったんです。それにお金
がなくてバザーで資金をつくらないと、
きちんと指導員に給料も支払えない状態
でした。そこに「元氣っ子」が市から統
一して委託を受けたことで、一定の基準
を設けて運営できるようになりました。
いまは「元氣っ子クラブ」の4人の専従
職員がいるので、各父母会が指導員の雇
用手続きなどの心配をしなくてよくなっ
たんです。

2004年度から「元氣っ子」による
統一運営が始まりましたが、新設の2学

童に対しては、指定管理者制度が導入され
ました。その当時、草加市は、新しくで
きる施設には、指定管理者制度を導入す
るという方針だったんです。その後も、
3つの学童に指定管理者制度が導入され
ました。2006年に、新たに指定管理
者制度が導入された2学童の選考では、
1000点満点の20点差でギリギリ指定
されました。

指定管理者制度は、期限が定められて
いるため、指導員が継続して雇用され保
育を行うことが保障されず、営利企業も
参入できるなど、学童保育にはなじまな
い制度です。その後、保育の専門性や継
続性の確保のために、父母会などが要望
を行い、一定の条件のもとでの随意契約
に変わりました。

設立の経過から言っても、私たちがや
っていることは、「市と市民とのパート
ナーシップ」に基づく事業だと思ってい

親がつながりあうこと

山内 小池さんがいまも学童保育運動に
関わっているのは、どうですか。

いまはもう、子どもたちも29歳と25歳

ます。ただ、行政的に見ると、「元氣っ子」
は、市から委託を受けている「一事業者」
ということになってしまっています。「元氣
っ子」ができてすでに9年も経っていま
すので、設立当時の市の担当者は全部変
わってしまいました。「元氣っ子」が
つくれた当時は知らない市の職員の方に
は、なかなかこういうことが理解されに
くいという悩みもあります。

保護者の連合組織をなくしてNPOだ
けにしてしまった他の自治体だと、NP
Oとして市に要望を出すことができない
ところもあるみたいです。経営に関わる
ことについては「元氣っ子」として市と
の話し合いを行っていますが、保護者と
しての要望などについては「草加市学童
保育の会」という父母会組織が、保護者
としての要望などについて行政や議会へ
の申し入れなどを行っています。

になりました。でも、子どもたちが1歳
になる前から保育園で6年、学童保育で
6年、12年間みんなに育ててもらったと



子育てシンポジウム

いう思いがあるから、その恩返しのような気持ちでやっています。

もともと父母たちが運営する「共同学童」としてやってきたところを「元気っ子」としてまとめるんだから、最初の3年くらいやればいいかなと思っていました。ところが、これまで一緒にやってきた父母や新しく入った父母たちが、「新しくできた『元気っ子』がみんなやってくるらしい」と、人任せになっ

てしまいました。

草加の学童保育は、父母会があつて、子どもがいて、保護者がいて、指導員がいて、一緒になって子どもを育てていく。それが正しい関係なんだということ、改めて考えさせられました。「元気っ子」は職員の賃金とか雇用、市とのやりとりはやるけれど、各学童の運営はあくまでもその保護者ががんばらなければ成り立たないんだということを、3年目くらいから改めて強調するようにしています。

こういう時代だと子どもを預けて働く親は増え、学童保育に対するニーズが高まりますから、児童数が増え大規模化がすすんでいます。昔は20、30人くらいで学童の規模はそんなに大きくなかったんだけど、いまは一番大きいところで105人定員とかね。保育集団を小さくするために、クラスに分けて運営を行っています。規模が大きくなると親同士のつながりもつくりにくくなるんです。指導員にとつても、別のクラスの子どもが分からないということもなっています。

あるところでは1年生だけで定員の半数にのぼって、経験のある保護者が少ないという事態も生まれています。保育の

面でも、高学年の子どもがいないと異年齢集団が難しくなる。運営そのものも厳しくなっています。

昨年、埼玉で全国学童保育研究集会所が開催されました。この研究集会所の成功に向けて取り組むなかで、父母会でつながりをつくって、子どもを真んかにながら指導員と協力しながらやること、が、どれだけ意味のあることかを改めて考えました。

集会には、草加市から400人近くの保護者と指導員が参加しました。全国から6000人近くの人が集まり、学童について、子どもたちの放課後の生活について、真剣に論議をしていることに、参加した多くの保護者の方は感動していました。親どうしがつながりあうことがとっても大事なんだということをみんな確認できたんじゃないかと思っています。

一昨年の東日本大震災でも、電話がつながらない、電車が動かないというなかで、近所の知り合いのお父さん・お母さんが一緒にいてくれたとか、「学童があつて良かった」という思いを新たにされた方もたくさんいらっしゃると思います。

地域で別の顔を持って

草加は市民運動がさかんなところで、冒険遊びや外国籍の子どもたちを支援する団体など、地域にさまざまな団体があります。子どもに関わる団体だけでなく、図書館や地域づくりの活動をしている団体など、さまざまな市民活動があります。学童保育だけでなく、こうした団体のいくつかにも所属したり、一緒に活動をし



子育てシンポジウム

たりしています。

山内 小池さんのすごいところは、そういう団体と立場を超えてずっとつながりをもってきたところですよ。これまでの活動のエネルギーの源はなんですか。

一緒になってがんばる仲間がいることが大きいですね。新しい世代の父母が参加して、一緒にやってくれる。「寝に帰るだけの草加市じゃなくて、草加市のために自分の居場所ができた」と言ってくれるお父さんたちもたくさんいます。そういう言葉に、自分も励まされます。

私はもともと、自分が住んでいる地域で教員をしたという思いがありました。生徒や親ともつながれる、そういう関係っていいと思います。

たまたま妻の勤務先が草加になったというだけで、草加市で暮らすようになりまし。草加に引越した後、初めて勤務先の浦和工業に行くために電車に乗ったとき、「このまちでは、家族以外、自分を知っている人は誰もいないんだなあ」って感じて、とても寂しい気持ちにな

なったのをよく覚えています。

でも、いまはいろんなところに知り合っています。子どもの学童が終わっても、いろんなつながりが残っています。そういういろんな人とのつながりが、私の支えになっているし、とても大切な財産だと思います。

山内 最後に、子育て世代や若い教職員に伝えたいことはありますか。

やっぱり、孤立をしないで地域でつながりをつくるのが大事だと思います。いまの人たちは、身近なつき合い方がへただと感じるがよくあります。学童の会長会をやると、父母会運営の悩みがたくさん出てきます。そういう悩みのなかには、お互い同士でいいねいに話し合えば解決できるという問題がけっこうたくさんあるんです。

私は、学童で学んだことがとても力になりました。子どもを見る目、子どもをまるごととらえるということ、こうしたことが教員としての幅を広げたと思っています。若い人には、人生の幅を広げてほしいですね。そのためには、学校の教員としてだけでなく、地域に別の顔を持つことがとても大事だと思いますよ。